

ポーランド王国の労働運動における二つの潮流の形成について(1878—1893)

川 名 隆 史

1. はじめに

1870年代に始まるポーランド王国⁽¹⁾の労働運動は、1880年代後半から、国際主義と愛国主義という二つの潮流への分化に進んだ。

当初、王国の運動を担った国際主義の思想は、ロシア留学時に当地の革命運動に加わり、マルクス主義にも触れて帰った若いインテリゲンチヤによって形造られたものであり、ロシアの革命運動と協力してロシア帝国の社会革命を展望するものであった。最初の社会主義党「プロレタリアート」によって王国の運動に伝統として植えつけられた国際主義に対し、1880年代に再燃し始めた独立願望の気運を背景にして、「社会主義」の衣を装った愛国主義が労働運動に浸透し始める。ポーランド独立の是非をめぐる真向うから対立するこの二潮流は、1893年に到って国際主義的な「ポーランド王国社会民主党」(SDKP)と愛国主義的な「ポーランド社会党」(PPS)の成立によって、組織的にも分化を遂げる。

本稿は、この二潮流の相克の過程——ポーランド独立の是非の問題に留まらず、社会主義思想上の原理的な対立にまで進んだこの過程を、各々の潮流の綱領的諸文書に依拠しつつ、思想的に跡づけようとするものである⁽²⁾。

(1) ウィーン会議後のロシア領ポーランド。「会議王国」とも呼ばれ、国王はロシア皇帝が兼ねた。

(2) 本稿では紙幅の都合により、労働運動史上の事実に関する註は極力省いた。とりあえず以下の文献を基本的な通史文献として挙げておく。*Historia polskiego ruchu robotniczego 1864-1964, tom 1, Warszawa 1967*; K. Grünberg, Cz. Kozłowski, *Historia polskiego ruchu robotniczego 1864-1918. Węzłowe za-*

gadnienia, Warszawa 1962; *Historia Polski*, tom 3, część 1, Warszawa 1963. 更に、同時代史料的价值を持つ文献として、Mazowiecki(L. Kulczycki), *Historia ruchu socjalistycznego w zaborze rosyjskim*, Kraków 1903; F. Perl(Res), *Dzieje ruchu socjalistycznego w zaborze rosyjskim do powstania PPS*, Warszawa 1932. などがある。また上述の二潮流に関する西欧での通史的研究として、以下のものが挙げられる。G.W. Strobel, *Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und SPD*, Wiesbaden 1974; U. Haustein, *Sozialismus und nationale Frage in Polen*, Köln-Wien 1969.

2. 国際主義の系譜

ポーランド王国では、1870年代半ばから、労働者、手工業者も加えたインテリゲンチヤによる社会主義サークルが活動し始める。当時、王国の工業は、繊維工業を中心に大規模化の途上であり、労働者人口も1880年には10万人を超えた。王国の労働者の民族構成は複雑で、非ポーランド人の割合が大きく⁽¹⁾、このため、それをもって国際主義思想の発生の一因とする向きもある⁽²⁾。初期のサークルは、秘密結社的なインテリゲンチヤ・サークルと、ウッチを中心とする、主にドイツ人の自助的な労働者サークルに大別される⁽³⁾。やがて、これらはヴァリンスキ等により統合の方向に向けられ、綱領の作成へと進んだ。1878年末にワルシャワで作成された綱領草案はジュネーブに送られ、無政府主義者も含めた亡命ポーランド人社会主義者による検証に付された。草案は、民族問題に関する記述を削られ、無政府主義的装いを施されて、1879年10月、「平等」創刊号に「ブリュッセル綱領」の名で発表された。この綱領は、普遍的・世界的な社会革命によって実現される社会主義こそ全人類的な解放形態であると規定し、それを、民族の解放しかもたらさない独立に對置することにより、愛国主義との断絶を宣言した⁽⁴⁾。

「平等」は翌年、同名の亡命ポーランド人社会主義者組織へと発展するが、1881年8月に、旧来の蜂起の伝統に則り、社会主義の名のもとで労働者、農民を独立運動に動員しようとするリマノフスキ等が脱退し、分裂する。リマノフスキは「ポーランド人民」を結成し、他方、ヴァリンスキ、メンデルソン等主流派は「曙光」を発刊して、国内の党建設に向け、革命論、組織論の再編成に着手する。

1881年11月、「曙光」は「ロシアの社会主義者同志へ（の書簡）」を發表し、後の「プロレタリアート」党結成への足がかりを築くとともに、ロシア帝国の革命を説いて、これまでの無政府主義的な抽象的国際革命論からの脱皮を図る。この「書簡」は、後の王国の労働運動の国際主義的潮流の祖型である。ここでは、政治的権利の獲得としてのロシア帝国のブルジョア民主主義革命が想定され、それに到る道として国際主義が、具体的にはロシア帝国内の諸民族の社会主義組織の結合という党組織論が提起されている。ポーランド問題ではこう論じる。「ポーランドの民族問題」は「社会発展の結果、すでに生命力を失っている。」「社会主義は経済問題であり、民族問題（すなわち「ポーランドの政治的独立の問題」）とは何ら共通なものはない。」「ロシア帝国領内での政治的権利のための戦いに際し、ポーランドの民族的・政治的問題を提起することは、この戦いの妨害以外の何ものでもない」と。つまり、社会主義による解放こそ民族の解放も含めた普遍的解放であり、政治的権利の獲得は、その最小限綱領である。だが、ここに独立の要求が入り込むと、ロシア帝国での政治的権利の要求はポーランドのみの政治的解放の要求に、諸民族のプロレタリアートの連帯はポーランドの諸階級の連帯に矮小化され、普遍的解放たる社会主義への展望は断ち切られてしまうというのである。「書簡」は、戦い的手段をテロとし、ロシア帝国内諸民族の統一組織と共通の綱領とを呼びかけて終わっている⁽⁶⁾。

1881年末から始められた党創立活動の結果、翌年9月、「社会革命党『プロレタリアート』労働者委員会のアピール」が発行され、党結成が宣言された。事実上の綱領である「アピール」は、「書簡」の要求をより厳密化した反面、社会主義と政治的権利とを同次元で要求しており、二段階革命論を提起した「書簡」以前の考え方に後退している⁽⁶⁾。

プロレタリアート党は、ワルシャワを中心に「抵抗基金」を軸に組織活動を進めたが、党組織は秘密結社的性格が強く、特にヴァリンスキ逮捕後は、クニツキの指揮下に、ロシアの「人民の意志」党とバリエで協定を結び、テロ志向を一層強化した。党は当初より厳しい弾圧にさらされ、1885年から翌年にかけての大量逮捕で指導部を失い、事実上壊滅した⁽⁷⁾。

プロレタリアート党は、資本主義の進展に伴って分割が深化、固定化しつつあるポーランド王国の社会状況の分析から、ロシア帝国内諸民族のプロレタリアートの階級的連帯と、政治的権利の獲得から社会革命に進む共同の戦いを提起した。だが、ロシア帝国の社会革命への盲目的信頼によってポーランド問題への具体的対応の見地は失われ、ブルジョア民主主義革命の観点もやがてテロを基軸とする全面的な社会革命論へと解消された。しかし、結果的にブランキズムに陥ったとはいえ、ロシア帝国の革命を諸民族の階級的連帯ととらえ、資本主義の抑圧からの解放こそポーランド民族の真の自由をもたらすのだという理念は、王国の運動に国際主義の伝統として受け継がれていくのである。

プロレタリアート党は、1888年2月頃、クルチツキにより「第二次プロレタリアート党」(DP党)として再建される⁽⁸⁾。折しも王国では、1886年に「声」が創刊され、またジュネーヴで翌年「ポーランド連盟」が結成されて(これについては次章参照)、社会主義者インテリゲンチャの間で民族問題への関心が高まっていた。DP党は当初、クルチツキのインテリゲンチャ中心のグループと、カスプシヤクの労働者グループの連合組織で、この二人の「奇妙な二重権力状態」⁽⁹⁾のもとにあった。

DP党は、ポーランド王国の運動史上初めて「ロシア帝国の民主的憲法とポーランド王国の自治」の要求を定式化したとして評価されている⁽¹⁰⁾。プロレタリアート党の国際主義の理念と、「ポーランド連盟」や「声」の愛国主義のプロパガンダとの間に立つ社会主義者インテリゲンチャの中であって、「自治」を叫ぶクルチツキは、当時としては折衷主義者と映じたかもしれない。だが、ロシア帝国のブルジョア民主主義革命と、ポーランド問題への対応として自治を提起したクルチツキの理論は、後に SDKP の民族理論の基礎となったのである。

1889年夏、王国にもうひとつの社会主義党「ポーランド労働者同盟」(ZRP)が生まれた。ワルシャワ大学のマルクス主義研究学生グループ、DP党に加わらなかった労働者やインテリゲンチャ、それにDP党のテロ志向に反発して離党したグループ等が結集した ZRP は、カスプシヤク流の経済主義的色彩の強い組織である。「資本論」ポーランド語訳者の一人、クシヴィツキを理論的支

柱とする ZRP は、「抵抗基金」のもとに多くの労働者、手工業者を組織した。経済主義を基調に公然活動を展開した ZRP は格好の弾圧の標的となり、1891～92年の大量逮捕でかなりの打撃を受けた。ZRP はこれを境に政治闘争に進ずる。「抵抗基金」をもとに、後の労働組合の先駆とも言える「職能組合」を作った ZRP は、日常闘争の面での SDKP の直接の先行者であった⁽¹⁾。

DP 党にしろ、ZRP にしろ、民族問題への対応、方針についてはきわめて曖昧である。プロレタリアート党から継承した国際主義の理念は、愛国主義を社会主義実現の阻害要因として棄却することを命じるものであり、またそれはロシアの革命への盲目的信頼で強く裏打ちされていた。しかし、「人民の意志」党の壊滅でロシア革命の展望に懐疑的となった一部の社会主義者は、亡命者を中心に再燃した愛国主義的思考に魅せられ、また他の一部は、スローガンとして国際主義を保持しつつも、現実には日常的な経済闘争に活路を見い出すことになった。DP 党も ZRP も、これら相異なる分子の入り混った組織であり、まもなく生ずる労働運動の二分化への芽を内包する過渡的性格の党だったと言えよう。

ここでひとまず、プロレタリアート党、DP 党、ZRP という流れをポーランド王国の労働運動の国際主義の系譜として措定し、次に、「社会愛国主義」として PPS に結実する愛国主義の潮流に目を転じよう。

(1) zob. *Historia Polski, op. cit.*, str. 473.

(2) *tamże*, str. 473.

(3) Strobel, *op. cit.*, S. 18 ff. 本書は、その幅広さにおいて他のどの SDKP(IL) 研究をも凌駕するものであるが、著者のドイツ人の役割の過大評価、史料上の問題等での批判もある。zob. recenzję B. Radlaka, *Z pola walki*, 1977 nr. 1, ss. 263-271. これについては、伊東孝之「最近の R. ルクセンブルク研究」『スラヴ研究』20号、158-159頁も参照されたい。

(4) “Program socjalistów polskich (drukowano w Brukseli 1878)” (“Równość”, 1879 nr. 1), w: *Pierwsze pokolenie marksistów polskich*, tom 1, Warszawa 1962, ss. 5-9; *Polskie programy socjalistyczne 1878-1918*, (zebral F. Tych) Warszawa 1975, ss. 65-70. なお、後者にはワルシャワで作成された草案も収録されている。*tamże*, ss. 59-65.

(5) “Do towarzyszy socjalistów rosyjskich”, (“Przedświt”, 1881 nr. 6-7), w: *Pierwsze pokolenie... op. cit.*, ss. 573-579; *Polskie programy... op.*

cit., ss. 175-181. ルクセンブルクはこの「書簡」を、「ポーランドの社会主義的伝統の歴史に第一級の重み持つドキュメント」だと絶賛している。R. Luxemburg, “Dem Andenken des ‘Proletariat’”, *Gesammelte Werke*, Bd. 1-2, Berlin 1974, S. 322. なお、この「書簡」は「人民の意志」党と「土地総割替」派に送られた。*Polskie programy...*, *op. cit.*, str. 174.

- (6) “Odezwa Komitetu Robotniczego Partii Soc.-Rew. ‘Proletariat’”, w : *Polskie programy...*, *op. cit.*, ss. 186-200. なお本書には、8月にこんにゃく版印刷でワルシャワに出回った手稿パンフレットが、活版パンフレットと異なる部分のみ収録されている。tamże, ss. 186, 192-194, 196, 198.
- (7) プロレタリアート党に関する文献は数多いが、最もまとまったものとして、L. Baumgarten, *Dzieje Wielkiego Proletariatu*, Warszawa 1966. を挙げておく。
- (8) DP 党については史料上の制約もあって詳細な活動についてはクルチツキ自身の著作に依るところが大きい。zob. Mazowiecki (L. Kulczycki), *op. cit.* このためポーランドでも研究は振るわず、敢えて挙げれば次のものくらいである。J. Borejsza, “Powstanie II Proletariatu i początki jego działalności”, *Z pola walki*, 1958 nr. 2, ss. 21-56.
- (9) Borejsza, *op. cit.*, str. 40.
- (10) por. Mazowiecki, *op. cit.*, str. 175 ; Borejsza, *op. cit.*, str. 22.
- (11) ZPR に関する包括的研究としては、F. Tych, *Związek Robotników Polskich 1889-1892*, Warszawa 1974. がある。また、理論的指導者とされるクシヴィツキには、著作集 L. Krzywicki, *Wybór pism*, Warszawa 1978 ; *Dziela*, 9 tomów, Warszawa 1957-1974, 回想録 *Wspomnienia*, 3 tomy, Warszawa 1957-1959 がある。

3. 社会愛国主義の成立

1870年代のポーランドの思想界を覆った「ポジティヴィズム⁽¹⁾」は、分割という現実の中で各人が「有機的労働」により富を蓄積させることでポーランド社会の再生を図るという思想であったが、具体的にはそれは分割権力への忠誠、抵抗の放棄を意味していた。「ポジティヴィズム」の目指す社会的調和は、まず労働運動の出現で乱され、続いて1880年代後半の愛国主義的気運の再燃により自ら方向を見失う。その転機が「声」の発刊(1886)、「ポーランド連盟」の結成(1887)であった。

「声」は急進的インテリゲンチヤの社会評論誌で、当初は寄稿者も社会主義

者にまで及んだ。だが、徐々にポーランド連盟と結びつき、1888年以降はその半機関誌化する。「声」の思潮は、一言で言えば、プチ・ブルジョアを基軸としたポーランド人社会の再編成であり、ポジティヴィズムからの脱却である。「声」は、小生産者による自助的な協同組合論を展開する⁽²⁾反面、ポーランド人の経済的自立の阻害要因としてユダヤ人に矛先を向け、反セム主義的傾向を露わにする。

検閲のため公然とは独立を叫べない「声」を代弁したのが、亡命組織ポーランド連盟である。連盟は、ポジティヴィズムを批判し、その綱領である「受動的防衛と宥和」から、「積極的防衛」への転換を唱える。連盟は分割前の領域でのポーランド国家再建を目標とし、民族の緊密な結合、「有産階級の主導のもとでの社会的団結」を主張する。民族の独立が社会的解放に対置され、階級闘争と社会革命は否定される。連盟は、国内の「ポーランド青年同盟」(ZMP)と共に、活動網を拡大した⁽³⁾。

この間、亡命社会主義者の動きも活発化する。1881年に国際主義派と決別したリマノフスキ等は、1888年にパリで「民族社会主義共同体」を結成し、翌年「覚醒」を発刊した。「覚醒」は創刊号に、後に「ポーランド民族社会党綱領」と呼ばれた綱領的指針を発表した。この「綱領」は、ポーランド独立と「ポーランドで支配的な社会経済諸関係の根本的変革」を主張する。独立と社会主義は不可分とされながらも、実質上、後者は前者に従属させられている。革命の主目標は独立であり、その後で種々の「手段」(すなわち改革)により「平和的に社会主義に進化する」とされている。革命を担うのは「知的プロレタリアート」、すなわちインテリゲンチヤであり、彼らが、民族の大半を占める「人民」を「民族」化する使命を与えられている⁽⁴⁾。リマノフスキは当初、ポーランド連盟には批判的であったと言われるが、社会主義と愛国主義の調和的結合を唱えるリマノフスキの言う社会主義が、連盟の否定する類いのものではないのは明白であり、両者の結合を妨げるものは本来的に存在しない。リマノフスキはまもなく「共同体」とともに連盟に加入する。「共同体」と「覚醒」の活動資金は連盟から出ていたとも言われている⁽⁵⁾。

1890年代に入ると、ポーランド王国の労働運動はメーデーを中心に新たな展

開を示す。王国ではメデーは非合法で、通常経済ストを伴ったし、メデーそれ自体が政治ストであった。1891年のジラルドゥフ事件、1892年の「ウッチ反乱⁽⁶⁾」は、王国の労働運動の大衆化の現われとして特に注目された。

労働運動の大衆化と、労働運動に関心を向け始めた「声」の動きとに呼応して、愛国主義的 ZMP に、労働問題や社会主義に関心を抱く者が現われた。ヴォイチェホフスキ等一群の ZMP 党員が、アブラモフスキとストゥルジュツキの率いる DP 党の分派「労働者連合」(ZR)に入ったのである。彼らは、ZR に愛国主義を移植し、同時に労働者に直に接する手段を得た。社会主義の装いをこらした愛国主義に国内基盤が形成された。彼らガリマノフスキの路線に接近したのは、むしろ当然の成り行きであった。

こうした動きに呼応するかのように、国際主義の陣営内にも重大な変化が生じた。メンデルソンの率いる「曙光」の愛国主義への転換である。「人民の意志」党壊滅の衝撃に加え、王国の運動が自らの域外の組織 (ZRP, ZR) を持つに到り、更には、亡命地であって、ポーランド独立を絶対是とする西欧の社会主義者の伝統的な思潮に取り巻かれていたことなどが、彼らの転換の誘因と考えられる。メンデルソンは、1891～1892年にかけて、「曙光」誌上に論文「ロシア」を発表し、方針転換を公言する。彼は、ロシアに留まる限りポーランド人は民族の解放も、社会主義の戦いに不可欠の民主主義も得られないと断じ、ポーランド王国の分離独立を要求する⁽⁷⁾。

こうして、ロシア観や革命論において、これまでの国際主義の見方とはっきり異なる潮流が形成されたのである。ロシアは後進的、反動的で、そこには革命の展望はない。ポーランド民族は一体となって、ロシアとの民族戦争を通じて独立すべきだ。ロシアからの分離こそ進歩の表明なのだ。こうした考え方、それは一言で言うと、連盟の戦略への恭順、蜂起の伝統への回帰である。ポーランド蜂起へのノスタルジアは、ポーランド人のみならず西欧の革命家の心にも頑として生き続けた。ヨーロッパ列強間に帝国主義ブロックが形成され、特にロシアとドイツ、オーストリアとの間の戦争が予見され、またロシアの革命への展望が消えた時、新たな打開の期待がこの戦争に向けられた。ポーランド人は反ロシアの陣営に加わって戦争に勝ち、その功績で独立を達成するという

戦略が設定された。

新潮流の発生には国内の社会的変化も作用した。王国では1870年代から大工業化が始まり、農民の労働者化が進む⁽⁸⁾。労働者の出身階層の変化が労働者の全般的な気分に変化を及ぼしたろうし、また、これまで民族解放のための基盤と考えてきた農民の労働者化を見て、これを新たな変革主体ととらえた者がいたとしても不思議はない。

後に「社会愛国主義」と呼ばれたこの潮流内にも、たとえばポーランドの領域設定に関する不一致や曖昧さがある。ここでは詳しく立ち入る余裕はないので次の点を指摘するに留める。当時、大部分の者に認められていたポーランド境界とは、「歴史的境界」、すなわち分割前の旧共和国領域である。そこにはリトアニア人や白ロシア人など、非ポーランド民族の居住地域も含まれる。当時の観点では、より広い地域がロシアから分離することこそ進歩と民主主義の要請に叶うとされていた。だが反面、この地域の重層的な民族抑圧、典型的にはポーランド人地主による異民族支配という現状への具体的アプローチは見られない。更にガリツィアとプロイセン領地域の問題もある。独立の合理性、可能性の論拠を常にロシアとの関係から導くため、王国以外のこれら二地域の問題が欠落してしまう。実はこの点こそ、後に SDKP と PPS の間の論争点となって現われてくるのである。

- (1) 1月蜂起敗北後、ロマン主義に代わり、政治的リアリズムを掲げて現われた思潮。社会の発展と教育の普及を目指し、特に文芸面で大きな成果をあげた。代表的理論家はA. シフィエントホフスキ、B. プルスなど。Vgl. R. Luxemburg, "Von Stufe zu Stufe. Zur Geschichte der bürgerlichen Klassen in Polen", *Gesammelte Werke*, Bd. 1-1, Berlin 1974, S. 98 f. (丸山敬一訳『マルクス主義と民族問題』, 福村出版, 1974, 153-154頁)
- (2) 協同組合を通じて民族の結合を図ろうとする「声」の構想の祖型が、ドイツのリベラル、特にシュルツェ・デリッチの思想に認められる。sieh z. B. H. Schultze-Delitzsch, "Die nationale Bedeutung der deutschen Genossenschaften(1865)", *Schriften und Reden*, Bd. 2, Berlin 1910, S. 234 f.
- (3) 「声」と「ポーランド連盟」については、原史料にあたる事が出来ず、以下の文献に依拠した。*Historia Polski, op. cit.* : J. Kancewicz, *Rozłam w polskim ruchu robotniczym na początku lat 90-ych XIX w.*, Warszawa 1961 ; *Głos 1886-1899*, Wrocław 1955 ; *Prasa polska 1864-1918*, Warszawa 1976.

- (4) “Program polskiej narodowo-socjalistycznej partii”, w: Mazowiecki, *op. cit.*, ss. 207–208. zob. M. Żychowski, *Bolesław Limanowski 1835–1935*, Warszawa 1971, ss. 224–228; M. Żychowski, *Polska myśl socjalistyczna XIX i XX wieku*, Warszawa 1976, ss. 175–177.
- (5) Żychowski, *B. Limanowski, op. cit.*, str. 223; Żychowski, *Polska myśl...*, *op. cit.*, str. 174.
- (6) 5月2日に始まった賃上げ要求のストが6日にはゼネ・ストに発展。軍隊が鎮圧に動員され、労働者と衝突。多数の犠牲者を出して、ストは10日頃終熄した。最盛時には8万人も参加したポーランド史上初のゼネ・スト、大騒乱事仰であった。zob. A. Próchnik, *Bunt łódzki w roku 1892*, Łódź 1932.
- (7) zob. Kancewicz, *op. cit.*, ss. 18–20; *Historia Polski, op. cit.*, str. 580.
- (8) zob. n. p. A. Żarnowska, “Społeczne rodowody miejskich skupisk proletariatu w Królestwie Polskim (próba typologii)”, *Historia XIX i XX wieku. Studia i szkice*, Wrocław itd. 1979, str. 25.

4. ポーランド王国の労働運動の二分化の完成——パリ会議と SDKP, PPS の成立

1892年の「ウッチ反乱」は、国内、国外の社会主義者の統合志向を強化した。1892年秋にワルシャワで ZRP, DP 党, ZR の統一指導部「中央サークル」が結成された。これには、1892年夏頃、アブラモフスキ等の作成した「ロシア領のポーランド労働社会党綱領の原則⁽¹⁾」が何らかの形で作用したと考えられる。「原則」は、ロシア帝国での政治的権利の獲得、ポーランド王国の自治、工場立法という三つの要求を有機的に結び合わせ、工場労働者、農業労働者、それに農民、プチ・ブルジョアなどすべての被抑圧階層による政治的権利と自治のための戦い、すなわちポーランドの民族解放を内包するロシア帝国のブルジョア民主主義革命への戦いを提起した。だが反面、「原則」は、当時の社会主義者の様々な思考の折衷的性格も垣間見せる。それは、テロの容認、飢饉によるロシアの変化への期待、自治要求の根拠として挙げるロシアの後進性の主張などである⁽²⁾。

「中央サークル」の成立は、必ずしも理論上の相異の解消の結果とは言えず、むしろ、弾圧で弱体化した ZRP や DP 党が運動の再強化のために、理論上の対立にもかかわらず ZR に接近したこと、また特に亡命社会主義者の統

合志向への反応の結果だと考えられる。

この間、亡命地では着々と統合の準備が進められた。だが、当初の意図は徐々に縮小され、結局、独立という共通の基盤に立つ愛国主義的な亡命社会主義者の、かなり純化された形での会議が開かれることになり、1892年11月、パリで亡命ポーランド人社会主義者会議（通常、「パリ会議」と呼ばれる）が開催された⁽³⁾。

パリ会議は、国内に PPS 創設を決め、亡命組織として「ポーランド人社会主義者在外同盟」(ZZSP) を結成した。パリ会議で作成された「ポーランド社会党綱領概要⁽⁴⁾」をもとに、ZZSP は国内の党の創設に向かう。「概要」では、ポーランドの「自立的民主共和国」としての独立の要求が、もはや自明のもの、他のあらゆる要求を実現するための前提、出発点となっている。社会主義も目標としては想定されているが、その道は、「土地、生産用具、コミュニケーション手段の漸次の社会化」という、これまでの「社会主義への平和的移行」の観点が認められている⁽⁵⁾。全体としてリマノフスキの見解が投影されている「概要」は、近いうちに創設される筈の PPS の綱領とされ、王国の労働運動に公式に独立の理念を持ち込むことになった。

1893年1月、メンデルソンは、ZZSP の使者としてヴィルノ経由で王国に向かった。彼のワルシャワでの活動については明らかではないが、ともかく2月から3月にかけて、ワルシャワで ZRP と DP 党の合体した PPS が成立した。この PPS については詳しくはわからないが、先の「中央サークル」と同じく、理論上の対立を残したままの雑居組織であり、それゆえ少なくとも、ZZSP の路線に立つ党の創設を目指したメンデルソンの思惑とは異なる組織だったことは確かである。とにかく後の経過から予想されることは、PPS 内に労働者とインテリゲンチヤの対立があったこと、しかもこの対立が或る程度、国際主義と愛国主義の対立に移し変えられることである⁽⁶⁾。1892年末に「曙光」(パリ会議後、ZZSP の機関誌となった)に、労働者間に人望のあるカスプシヤクをスパイと中傷する記事が載り、労働者の反インテリゲンチヤ感情が強まった。DP 党ばかりか、ZRP の労働者も、ZZSP のこの行為を、インテリゲンチヤの、国内の運動を支配しようとする策謀と見たのである⁽⁷⁾。もともと国

際主義の伝統の党に属す労働者が、反インテリゲンチヤ感情から、インテリゲンチヤ(奇異に見えるかもしれないが、ZZSPとインテリゲンチヤが同一視されていた)の持ち込む愛国主義的思想を、インテリゲンチヤもろとも拒絶したとも考えられる。後述する1893年7月のPPSの名称変更は、党内の労働者の分裂と見ることも出来る。また、PPSの反ZZSP気分を決定的にしたのは、「PPS綱領概要」がP.P.S.の党章とともに「曙光」(1893年5月号)に掲載されたことである⁸⁸⁾。パリ会議については、すでに1892年末には王国に伝えられていたが、「概要」やZZSPの性格については、大部分の労働者には未知のままだった。カスプシャクの問題でZZSPに反感をつのらせていた労働者は、今度は、承諾もなしに綱領が決められ、勝手に党章が使われ、しかも「曙光」に載った「概要」に、過去のシュラフタ蜂起を賛美する内容の前文⁸⁹⁾が付けられていたことに憤慨し、ZZSPとの断絶を決意する。

PPS内のこうした気分を知ったZZSPは、1893年6月、今度はヴォイチェホフスキを派遣した、彼はヴィルノのZMPグループ(ピウスツキ等のグループで、「PPSリトアニア支部」を名乗っていた)を頼り、6月末にヴィルノで会合を開いた。後にPPS第一回大会とされたこの会合は、「概要」を綱領として承認し、8月の第二インター大会への代表権をZZSPに委譲した。会合に出席したのは、すべてポーランド連盟やZMPと関わりのある者たちであった。

1893年7月、ヴィルノ会合の知らせと「概要」の載った「曙光」が同時に王国に届いた。折しも第二インター大会への代表権問題を討議していたPPSワルシャワ組織の労働者は、ZZSPに代表権を与えたヴィルノ会合の決定に反発し、当時チューリヒでルクセンブルクのグループに加わっていたマルフレフスキに代表権を与えた。

多くの亡命社会主義者がZZSPに統合された時、プロレタリアート党以来の国際主義の伝統を守る唯一のグループがチューリヒにあった。ルクセンブルクとヨギヘスの率いるこのグループは、1893年7月、パリで「労働問題」(SR)を発刊する。(以後、彼らはSRグループと呼ばれ、事実上SDKPの国外指導部として機能する)SR創刊号は彼らの、したがってSDKPの綱領的文書に等しい。恐らくルクセンブルクの手になる「ポーランドの労働者階級の政治

的任務⁽¹⁰⁾」と「非民族化について⁽¹¹⁾」は、国際主義の立場で、ロシア帝国のブルジョア民主主義革命とその後の立憲体制のもとでの社会主義革命という二段階革命論を定式化し、愛国主義派の説く「社会主義への平和的移行」論を否定する。民族問題については、曖昧な言い回しでポーランド王国の自治を要求するにすぎない。確かにこれらの論説は、亡命地において孤高を持するルクセンブルクが、革命忘却への警鐘を鳴らす意図のもとに著したもので、民族理論の展開を意図したものではない。とはいえ、すでにここには彼らの革命論とポーランド問題観との齟齬が見てとれるのである。アブラモフスキの「原則」が、社会主義に到る過程を、自治に基づくポーランド王国独自のものとしているのに対し、ここでは一貫してロシア帝国という地域的枠組が前提されており、それだけロシアの革命とポーランドの民族的解放との具体的関連が曖昧にされている。DP 党や「原則」の例があるにもかかわらず、ここでは「自治」という語さえ使われていない。むしろここに現われるのは、プロレタリアート党から受け継いだルクセンブルクの独特の思想である。それは、「民族抑圧は資本主義総体の部分現象であって、労働者の階級闘争こそ民族解放の戦いにはかならない」、「社会主義体制のもとで初めて、人類はあらゆる抑圧から解放されるのであって、それ以前の解放は部分的解放にすぎない」という考え方である。いずれにせよ、民族問題への構想の欠如は覆いがたい。だが逆に、日常の経済闘争にはそれが有利に作用した。国際主義のスローガンに未だ現実味がない時、具体的に展開されえたのは経済闘争の側面のみであり、その意味では、SDKP は ZRP の真の後継者であった。

一方、国内の PPS の労働者は、マルフレフスキと連絡をとりながら、7月末にワルシャワで集会を開き、「ポーランド社会民主党」(SDP)と改称し(これまでの PPS は、後の ZZSP 系の PPS との区別のため「旧 PPS」と呼ばれる)、SR を機関誌とした。更に8月には、SDP と SR グループの間で協定が結ばれ、同時に SDP は「ポーランド王国社会民主党」(SDKP)と改称した。

6月末にヴィルノで党大会を開いたと自称する PPS の方は未だ実体がない。ZZSP は10月に再びヴォイチェホフスキを送り、SDKP の対抗組織作りを策す。当初、ストゥルジェツキの ZR 労働者グループが基盤にと考えられた

が、このグループは、独立を主張して SDKP には加わらなかったものの、階級闘争を叫んで ZZSP にも忠実ではない。ストウルジェツキとメンデルソンの反目も大きく作用したとも言われる。結局、ヴォイチェホフスキは自分の母体組織 ZMP を頼って、ワルシャワに「PPS 労働者委員会」を創設する。初の ZZSP 系 PPS の組織である。SDKP に移行しなかった旧 PPS 党員が、そしてストウルジェツキ・グループもメンデルソンの ZZSP 脱退後、これに加わった。新 PPS で主流を成したのは、当然、ZZSP に支援されたヴォイチェホフスキ等で、ストウルジェツキは左派に位置した。PPS は、当初より左右対立を内包していたのである。

SDKP と PPS の成立により、王国の労働運動は二つの潮流に組織的に分化した。以後、SDKP が壊滅した数年間を除いて、この両党は、国内、国外で複雑に絡み合い、抗争を続け、やがて1905年革命というひとつの転機を迎えるのである。

- (1) “Zasady programu Polskiej Rob. Socjal. Partii pod zaborem rosyjskim”, *Polskie programy...*, *op. cit.*, ss. 226-242.
- (2) *tamże*, ss. 227-228, ss. 230-231.
- (3) 出席者は、「曙光」(形式上は DP 党の指導部として)から6名, ZR から6名, 「覚醒」(すなわち「民族社会主義共同体」)から3名, その他3名である。議長はリマノフスキ。パリ会議に到る過程, 会議の経過については, J. Kancewicz, “Zjazd Paryski socjalistów polskich (17-23 XI 1892 r.) Jego geneza, przebieg i znaczenie”, *Z pola walki*, 1962 nr. 4, ss. 3-34 を参照されたい。
- (4) “Szkic programu Polskiej Partii Socjalistycznej”, *Polskie programy...*, *op. cit.*, ss. 253-260.
- (5) *tamże*, str. 253, str. 254.
- (6) 労働者とインテリゲンチヤの関係については、かなり一面的ではあるが、確認されうる限りで ZRP 党員の後の党帰属を示した次の表がひとつの指標となろう。

	確認総数	SDKP	PPS	不明 etc.
労働者	124 (69%)	39	12	73
手工業者	12 (7%)	7	0	5
インテリ	44 (24%)	12	14	18
計	180(100%)	58	26	96

(Tych, *ZRP, op. cit.*, ss. 441-447 の表から筆者が作成した) 他党の資料は手許にないが、1894年の SDKP 党員の職業を示す次の表と対比させると、当時の国際主義派内の労働者の持つ意義が理解されよう。

	確 認 数	%
労働者	164	75%
手工業者	33	15%
インテリ	22	10%

(B. Radlak, *Socjaldemokracja Królestwa Polskiego i Litwy 1893-1904*, Warszawa 1979, str. 149)

その際、初期の PPS が、未だ労働現場に基盤のない、インテリゲンチヤ中心の党だったことが想起されるべきである。zob. Kancewicz, *Rozlam...*, *op. cit.*, str. 31.

- (7) たとえば、シュトロベールがそれを述べている。sieh Strobel, *op. cit.*, S. 74 f.
- (8) これ以前にも、PPS のワルシャワ組織が、ZZSP の送ったメデー・ピラを、その愛国主義的内容ゆえに焼却し、自前のピラを新たに作成したという出来事もあった。zob. *Materialy do dziejów ruchu socjalistycznego w Polsce*, (pod red. J. Krasnego), tom 1, Moskwa 1927, str. 14.
- (9) “Szkic programu PPS”, *op. cit.*, ss. 242-252.
- (10) “Zadania polityczne polskiej klasy robotniczej”, *Socjaldemokracja Królestwa Polskiego i Litwy. Materialy i dokumenty*, tom 1, część 1, Warszawa 1957, ss. 3-6.
- (11) “O wynaradawianiu”, *tamże*, ss. 6-9.

5. 結びにかえて

ポーランド王国の社会主義的労働運動は、1月蜂起敗北後の社会に、労働者の社会的解放という新たな解放原理を伴って現われた。国際主義を掲げ、ロシア帝国の社会革命を夢見たプロレタリアート党は、ツァーリズムの強大な抑圧装置の前にあえなく潰えた。労働運動の弾圧は民族抑圧なのか、階級抑圧なのか。この問いを前に、ポーランド人社会主義者は揺れ動いた。プロレタリアート党の亡命残党の多くは、やがてツァーリズムへの敵対を民族闘争として戦略化するが、そこには古いシュラフタ蜂起の理念の復活さえ見てとれる。ポーランド蜂起の賛美を伝統とする亡命地の環境、また特に、ポーランド連盟による

愛国主義の再編成が、この過程に大きく作用した。他方、国内の運動は未だ国際主義の伝統のうえに築かれており、ZRP、DP 党の国際主義者たちは、この亡命者の転換に失望、反発し、自らの立場をより純化させる。ポーランド王国の労働運動は、民族の問題を社会主義との脈絡の中で展開しえないうちに、愛国主義の再編に遭遇し、結局、極端な形で二極分解を遂げてしまったのである。

本稿は、今後の SDKP の民族理論に関する研究のいわば準備作業として、ポーランド王国の労働運動の分化過程、その思想展開の経過を整理したものである。ここでは、二潮流への分化を、綱領ないしはそれに類する文書から、民族問題に絞って跡づけようとしたため、労働者やインテリゲンチヤの現実の運動との少なからぬ乖離が生じたことは否めない。だが、民族問題は、ポーランド王国の労働運動に運命的に突きつけられた原理的な問題であり、その後の運動の特異な展開を決定づけた要因であった。この意味でも、1890年前後の時期の民族問題に関する議論の持つ重要性は否定しえないのである⁽¹⁾。

- (1) ここで、本稿の内容に関連する邦語文献を幾つか挙げておく。宮島直機「ポーランドにおける民族主義運動とポーランド人の価値観」『中央大学90周年記念論文集』1975、加藤一夫「ポーランド王国社会民主党の形成」『西洋史学』1978、同著者「ポーランドにおける初期社会主義運動—『プロレタリアート』党を中心に—」『東欧史研究』1978、など。

(筆者の住所：大宮市奈良町79-115)